

|        |   |
|--------|---|
| 研究課題   | 楽しみ、挑み、かかわりながら、進んで運動をする児童の育成  |
| 副題     | ～体育科における ICT 機器の効果的な活用を通して～   |
| キーワード  | 「石小っ子体育ハンドブック」  |
| 学校/団体名 | 公立石巻市立石巻小学校   |
| 所在地    | 〒986-0832 宮城県石巻市泉町1丁目1番2号   |
| ホームページ | <a href="https://www.city.ishinomaki.lg.jp/school/20300100/">https://www.city.ishinomaki.lg.jp/school/20300100/</a> |

## 1. 研究の背景

「Society5.0」や「人生100年時代」といったキーワードが示すように、これから迎える時代は、まさに変化の激しいものであると言える。これからの社会を主体的に生き抜くためには、「答えのない問い」に対して、生涯学び続ける力が求められる。それらの力を身に付けるために、教育現場では「学ぶ意欲を持って主体的に課題に取り組む」「考えを伝え合い、仲間と練り合う」「身に付けた知識や技能を活用して生かす」「自らの学びを自覚し、次につなげる」ことが自ら行える児童を育てていくことが求められる。スポーツ庁が2021年12月に公表した2021年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果によると、前回調査した2019年度に比べ、体力合計点について小・中学生の男子・女子ともに低下したことが明らかになった。低下の要因として、主に「運動時間の減少」「学習以外のスクリーンタイムの増加」「肥満に該当する児童生徒の増加」の3点が考えられるという。これらはいずれも、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けたことで、更に拍車がかかったと見られている。また、感染症拡大防止に伴い、学校の活動が制限されたことで、体育の授業以外での体力向上の取組が減少したことも考えられるとしている。自らの可能性を發揮し他者と協働しながらよりよい社会を切り拓いていくために必要な資質・能力を児童に身に付けさせていくこと、児童に健全な発育・発達を促す運動機会を保障すること、児童の体力及び運動能力を高めていくことを考えたとき、教科体育の果たす役割は大きいと言える。

本校は、意欲的に学習に向かう姿勢が身に付いている児童が多い反面、生活習慣が不規則なため生活リズムが整っていないかったり、安定した人間関係を築くスキルが十分に備わっていないなど課題を抱えた児童も少なくない。体育科では、児童の運動能力に差が見られ、体力運動能力調査の結果からも十分な体力が備わっているとは言い難い。新型コロナウイルス感染防止のため活動が制限される中、その傾向はより一層拍車がかかり、教科体育だけでなく、外遊びなど教育活動全般において運動に親しむ場面を設定すること、自他の課題解決に向けて、よりよいかかわりができるように支援することが喫緊の課題である。また、GIGAスクール構想により1人1台タブレットが配付されたが、その活用方法や内容については教師個人のICTスキルによる部分が多く、全教員で共有していく必要がある。体育科におけるICT機器の効果的な活用について、全教員の情報スキルの向上と、指導力・活用力の向上は本校の大きな課題であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本校は昨年度、「楽しみ、挑み、かかわりながら、進んで運動をする児童の育成」を研究主題に、体力向上を促す教科体育の指導の工夫と、休み時間の外遊びの工夫を進めてきた。体育科の授業に対する児童の意識向上、教師の指導力の向上等、ある一定の成果が見られた反面、自己の課題解決に向けて主体的に体力づくりに取り組もうとする意識の向上、児童が成果を感じられるような自己の取組や結果の累積方法、体育科の指導における教員のICT機器活用能力の向上、という3点の課題が明らかになった。

令和5年度は、上記の研究を進める上で、教師がICT機器をあらゆる場面で効果的に活用することにより、児童が体力・技能向上において自己の課題を見付け、その課題を解決するために、ICT機器を学習ツールとして主体的に活用できる資質・能力を育みたいと考えた。そこで本研究は、児童の課題解決ツールとなる「ハンドブック」の作成と活用を通して、児童の体力づくりに対する意識・態度や、教科体育における知識・技能、および教員のICT活用能力についての変容を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の経過

| 実施月 | 実施内容   | 備考   |
|-----|--|--|
| 4月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>研究全体会：研究内容や方向性についての確認</li> <li>「石小っ子体育ハンドブック」の作成</li> </ul>   |  |
| 5月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>「石小っ子体育ハンドブック」の作成と研修（1学期）</li> <li>第1回児童意識調査と実態調査：研究部</li> <li>第1回体育科授業研修会<br/>講師：平川譲先生（筑波大学附属小）<br/>「陸上運動の授業づくり・鉄棒運動の感覚づくり」</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>近隣の小中学校教員も参加しての研修会を実施</li> </ul>                    |
| 6月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>体力・運動能力調査の実施</li> <li>第1回校内研究授業：2学年<br/>単元名「ころころ・びよんびよん・さかさまチャレンジ！<br/>（マットを使った運動遊び）」</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>ハンドブックの活用</li> </ul>                                |
| 7月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>第2回校内研究授業：5学年<br/>単元名「大変だ！（表現）」</li> </ul>  |  |
| 8月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>職員研修「体育科におけるICTの効果的な活用方法について」</li> <li>「石小っ子体育ハンドブック」の作成（2学期）</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>体育の授業におけるICTの活用事例に関する研修を実施</li> </ul>               |
| 9月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>第3回校内研究授業：1学年<br/>単元名「とんで とんで とびこそう（跳の運動遊び）」</li> <li>第2回体育科授業研修会<br/>講師：森田 智幸 先生（山形大学）<br/>「体育科の子供相互のかかわりと子供の学びの見取り</li> </ul>         | <ul style="list-style-type: none"> <li>ハンドブックの活用</li> <li>近隣の小中学校教員も参加しての研修会を実施</li> </ul> |

|     |  |  |
|-----|--|--|
|     | <p>について」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「石小っ子体育ハンドブック」の作成（2学期修正）</li> </ul>   |  |
| 10月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回体育科授業研修会<br/>講師；眞榮里 耕太先生（筑波大学附属小）<br/>「体育科の授業づくり」</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の小中学校教員も参加しての研修会を実施</li> </ul>                     |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第4回校内研究授業：6学年<br/>単元名「跳び箱運動」</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンドブックの活用</li> </ul>                                 |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第5回校内研究授業：4学年<br/>単元名「キャッチバレーボール（ネット型ゲーム）」</li> <li>・第4回体育科授業研修会<br/>講師：森田 智幸 先生（山形大学）<br/>「体育科の子供相互のかかわりと子供の学びの見取りについて」</li> <li>・第2回児童意識調査と実態調査：研究部</li> <li>・「石小っ子体育ハンドブック」の作成（3学期分）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンドブックの活用</li> <li>・近隣の小中学校教員も参加しての研修会を実施</li> </ul> |
| 1月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第5回体育科授業研修会<br/>講師：清水 由 先生（桐蔭横浜大学）<br/>「シンプルで子どもが伸びる体育の授業づくり」</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の小中学校教員も参加しての研修会を実施</li> </ul>                     |
| 2月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「石小っ子体育ハンドブック」の見直しと作成</li> </ul>   |  |

#### 4. 代表的な実践

代表的な実践として、「石小っ子体育ハンドブック」の作成と、それを活用した授業実践を挙げる。

##### (1) 「石小っ子体育ハンドブック」

「石小っ子体育ハンドブック」は児童が体育科の授業において自他の課題解決時に閲覧することを目的とした、各運動のこつと手本となる動画や、家庭で取り組める感覚づくり運動の動画を運動能力ごとにまとめたハンドブックである。パワーポイントで作成した後、PDFに変換、リンク機能を活用して作成した。

リンク先には「教員による実技動画」と

「文部科学省によるデジタル教材（YouTube）」を貼り付け、児童が自分の運動能力向上に向けた課題解決に必要な動画をタブレットでいつでも閲覧できるようにした。

ハンドブックは年3回に分けて作成し、児童の活用状況や場面を検証しながら、その都度修正を行った。



(2) ハンドブックを活用した授業実践

日 時：11月8日(水)5校時

学 級：第6学年1組

授業者：赤間 広弥 教諭

|                 |  |   |
|-----------------|--|---|
| 単元名             | 「跳び箱運動」(器械運動)  |   |
| ねらい             | 安定した台上前転ができる。【知識・技能】   |   |
| 視点              | 手立て  | 手立てに対する児童の姿   |
| 運動意欲と体力の向上を促す工夫 | 手立て①<br>段階的に取り組めるような学習過程を工夫する。                                     | ○児童が見通しを持って活動しており、運動量も確保できていた。どの児童も意欲的に運動していた。  |
|                 | 手立て②<br>導入で、単元を通して行う「感覚づくり運動」を取り入れることで、本時の主運動につながる動きを身に付けられるようにする。 | ○主運動につながる動きを多く経験し、台上前転に必要なポイントを意識して取り組むことができていた。<br>●腰の位置を高く上げる感覚づくりの運動が、速さを求めるあまり、ただ回数をこなすだけの動き、腰の位置が低い動きになっており、安定した台上前転につなげることができない児童がいた。 |
| 伝え合う活動の工夫       | 手立て①<br>タイムシフトカメラを使い、伝え合いに活用することで、課題解決に向けた考えが深まるようにする。             | ○安定した台上前転をするために必要なポイントをしっかりと押さえ、映像を見ながら話し合う様子が見られた。   |
|                 | 手立て②<br>台上前転の4つのポイントを確認できる映像や掲示物を用意し、いつでも確認できるようにする。               | ○タイムシフトカメラで確認した様子と、掲示物を比較し、技の改善に向けて必要なポイントを確認する様子が見られた。   |

授業写真



【腕支持をしながらの腰上げ】



【タイムシフトカメラの活用】



【ハンドブック内の映像を見てポイントを確認しながらの学び合い】

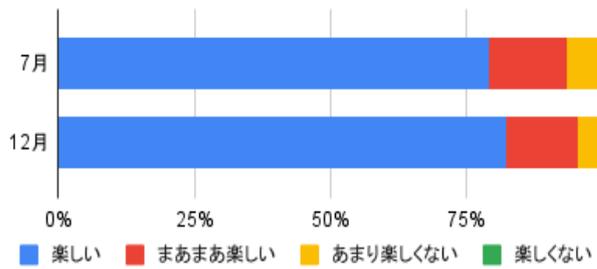
|           |   |
|-----------|---|
| <p>成果</p> | <p>【視点1】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○感覚づくりの運動で、かえるの足打ちや、大きな前転などに取り組んだことで、腕支持感覚や腰を上げる感覚を高めることができた。</li> <li>○段階的に取り組める学習過程を工夫したことで、見通しを持ち、安心して学習に臨むことができた。</li> </ul> <p>【視点2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○石小ハンドブックとタイムシフトカメラを活用し、自分や友達の技を見合うことで、子供たちの間に伝え合いが生まれた。</li> <li>○石小ハンドブックで安定した台上前転の動画を掲示したことで、いつでも自分の技と比較し、違いなどを確認することができた。</li> <li>○石小ハンドブック内に記録した自分の試技を繰り返し見ることで、自分の課題を解決しようとする姿勢が育った。</li> <li>○石小ハンドブックで踏切、着手、腰の高さ、着地の4つのポイントを確認できたことが、体の動かし方やよりよい動きについて「分かる」ことにつながっていた。</li> </ul> |
| <p>課題</p> | <p>【視点1】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●感覚づくりの運動では、子供たちが速さを求めるあまり、動きが小さく、腰の位置が低くなっていた。「速さ」よりも台上前転につながる「腰の高さ」を大切にしたい。</li> </ul> <p>【視点2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●タイムシフトカメラの遅延秒数が短く、画面元へ急いで行く児童が多かったため、しっかりとした着地を意識させることができなかった。</li> <li>●低学年でも石小ハンドブックが活用できる授業の在り方について研修が必要。</li> </ul>   |

## 5. 研究の成果

7月と12月に、児童と教員を対象に体育の授業と石小ハンドブックの活用に関する意識調査を行った。

(1) 児童の意識調査の結果から

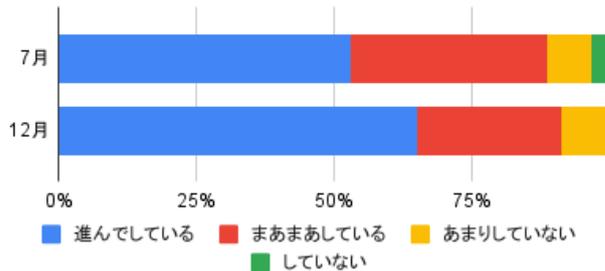
体育の 学習は 楽しいか。



【考察】

「進んでしている」「まあまあしている」の割合は 90%を超えた。体育の授業で、「楽しさ」や「達成感」を味わわせられたことで、運動に対する意欲が高まってきたと考えられる。

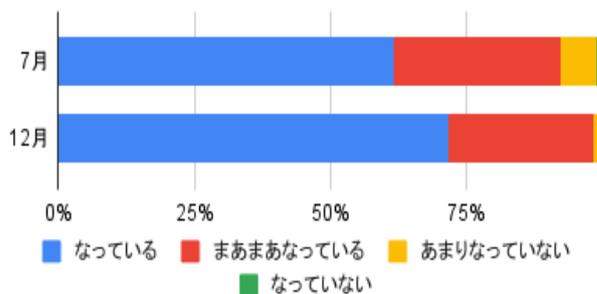
ハンドブックを すずんで活用 しているか。



【考察】

「進んでしている」「まあまあしている」の割合が 90%を超え、「進んでしている」の割合が増加した。児童が進んで活用したい思えるよう内容にしたことや、体育の授業で活用する場を設定したことが要因だと思われる。

ハンドブックは 技や動き「できる」、やりかたが「分かる」ような内容になっているか。



【考察】

「なっている」「まあまあなっている」の割合が増加し、90%を超えた。児童の活用状況や授業内での活用について、毎学期ごとに検証し、改善を行ったことが割合の増加につながったと考える。

(2) 教員の意識調査（自由記述）の結果から

- 「ペアやグループで課題解決に向けて試行錯誤する活動、支え合う活動の設定」、「ハンドブックを活用した体の動かし方に着目して考えられるような資料を示すこと」が、運動への気付きを促し、見合い（互いの動きを意識してみること）、伝え合いを生んでいた。
- 児童が実際に動きながら話し合う姿から、「伝え合う」ということは、言語だけで伝えることではなく、体を動かして見せること、動きを模倣することも伝え合うことであることが分かってきた。その際にハンドブック内に試技を記録し、互いに見せ合うことができたのは非常に効果的であった。

6. 今後の課題・展望

研究当初は「石小っ子体育ハンドブック」の作成と活用、体力・運動能力調査の結果を記録する「石小っ子体力記録カード」の作成と活用、体育科における教員のICT機器活用スキルと指導力の向上の3つを研究の柱に据え、期待される波及効果として、記録カード持ち帰りと保護者

評価による、子供と保護者の体育に関する新しいコミュニケーションの創造と近隣の小中学校への校内研究授業、職員研修会の公開、「ハンドブック」と「体力記録カード」の紹介を考えた。

しかし、体力・運動能力調査の結果を記録する「石小っ子体力記録カード」の作成と活用はタブレットの保存容量と個人情報保護の観点から実施することができず、子供と保護者の体育に関する新しいコミュニケーションの創造までには至らなかった。保護者の学校評価アンケートでは、子供の体力不足を感じる保護者が多いことが分かっており、今後の課題であると考えます。

また、児童と教員の意識調査から「ハンドブック」の有効性が明らかになったので、近隣の学校に実践の結果を伝えることで、「ハンドブック」の波及をより一層、推進していきたい。

「ハンドブック」の作成と、授業での活用は、まだまだ実践途中である。活用を重ねながら、検証と改善

を積み重ねると共に、体育科における教員のICT機器活用スキルと指導力の向上を図りたい。

## 7. おわりに

市内の中心校である本校は、教員の授業実践を市内の小中学校に広めることが求められる。今回のハンドブックの作成と活用は、教員の授業実践の向上、ICT能力の向上につながると共に石巻市内の教員の授業改善にもつなげることができたことが大きな成果であると考えます。

本校の研究にあたっては、山形大学の森田先生、筑波大学付属小の平川先生、眞榮里先生、桐蔭横浜大学の清水先生の御指導のおかげでここまで来ることができた。この場で御礼を申し上げます。

## 8. 参考文献

・特になし